

異端

知っておきたいキリスト教のことば (17)

「彼は異端児だ」という言葉を聞いたことはありませんか。一般的に「異端」という言葉は、あまりいい意味で用いられていないように感じます。

キリスト教はもともと、ユダヤ教の分派と考えられていました。ナザレのイエスを救い主と信じる人々は、「ナザレ派」という名前と呼ばれていました。しかしユダヤ教徒からすると、キリスト教の教えは受け入れられるものではありませんでした。そしてユダヤ教徒はキリスト教徒を「異端」と考えていきます。キリスト教はこうして、ユダヤ教とは別の宗教となりました。



そしてキリスト教の歴史の中に、「異端」と呼ばれるグループや人物が数多く出ていきます。そもそも「異端」というのは「正統」なものが決まって初めて出てくるものです。キリスト教の教理は 325 年のニカイア公会議から 381 年のコンスタンチノポリス公会議にかけて固まります。

たとえばその中に、三位一体論というものがあります。簡単に言うと、父なる神と子なるキリストそして聖霊とは、一つの神であり、同時に三つの位格を持つということです。なかなか理解しづらいことかも知れませんが、しかし正教会ではこの三位一体論は、「理解する」対象ではなく「信じる」対象としての神秘的なのだといいます。

ともかく、この教理が確立したことで、キリストは父なる神の被造物である(アレイオス派)とか、聖霊は神ではない(マケドニオス派)といった教えやグループは異端とされていくのです。

その他、キリストは完全な神であり、完全な人であるという考え方に反するものも異端とされていきます。このように、自分たちの正当性を守るために、違う考え方を「異端」として排除していったのです。

次回は「異邦人」です。お楽しみに。